

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 『狭衣物語』の本文点描（1）：引歌表現の本文異同<br>雑考  |
| Author(s)    | 小林, 理正  |
| Citation     | 詞林. 2019, 66, p. 25-36  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/73436">https://doi.org/10.18910/73436</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 『狭衣物語』本文の点描(1)

— 引歌表現の本文異同雑考 —

小林 理正

はじめに

近ごろ発表される『狭衣物語』の論考のなかで錯綜する本文へ分け入るものはわずかである。<sup>1)</sup>このような研究状況をどのように捉えるべきか稿者には分からない。けれども、特定の研究者が『狭衣物語』の本文を考察し、その結果を蓄積していく在り方には問題があると考えている。——それこそ三谷榮一系統論<sup>2)</sup>が大きな批判にさらされることなく支持され続け、その結果、結論ばかりが一人歩きたかつての有り様を再現してしまいかねないからだ。それゆえ、各人が程度の差こそあれ『狭衣物語』の本文と向き合わなければならぬと思う。

そこで今回稿者は『狭衣物語』の異文の中から引歌表現の本文異同に着目し、本文について考えてみたい。その前にまづ異文の生成要因について確認しておく。本文異同の発生には大きく二つのパターンがある。一つ目は読者であり作者でも

あった享受者の解釈行為と書写活動に起因するもの、二つ目は誤脱衍に因る機械的な損傷に因るものである。また、これとは別に「改変」という用語によって本文異同が説明される場合もある。この「改変」は上述二パターンの中でも前者を想定して用いられる用語だと思しいが、考察対象である異文を「改変」というコトバによって説明可能か否か、一度立ち止まって考えたことのある研究者はそう多くはないだろう。そこで以下に掲げる本文を例として『狭衣物語』の本文異同を検討するさい、基本となる考え方を整理しておきたい。

① 深川本・巻二・一四丁裏〜一五丁表

いみじき御心まどひにも、この人ときやき、しらせ給けん。  
いとゞはづかしういみじきに、ものもおほえ給はず、  
たゞひきかづきてなき給御けはひなど…

② 高野本・巻二・一一丁裏

いみじき御心まどひのなかにもき、しらせ給らん。いとゞはづかしくわびしきに、ものおほえさせ給はず、

たゞひきかづきてなき給へる：

① 深川本では「いみじき」とあるが②高野本では「わびしき(王比之幾)」とある。「わびしき」とある伝本は他に宮内庁三冊本・松井本・松浦本・九条家旧蔵本・平瀬本・慈鎮本などがある。元和九年本は挙例部が②とほぼ同様だが、囲み表示部は「いみじき」となっている。①②のように意味上異なる二種の本文が存在するとき、どちらか一方の表現を「改変」本文とみる向きがある。挙例の場合は主に二段階の変容過程が考えられる。(1)「いみじき」の字母が「以見之幾」とあるとき、これを「わみじき(和見之幾)」と誤写する。(2) 損傷本文「わみじき」では意味をなさないので当該本文を有する伝本を用いて書写本作成に及ぶさい、書写者が「わびしき(和比之幾)」と解釈可能本文へ校訂する。「改変」ということができる段階は(2)のみだが、このような考証過程を経なければ異文の在り方を「改変」として処理することはできないのである。ましてや「異本」、あるいは第二系統本と位置づけられる伝本の本文だからといって一概に「改変」という用語で本文異同を簡単に説明すべきではない。

——『狭衣物語』の本文研究は難しい。けれども、同作の本文と向き合わなければ異文への理解が深まるはずのないことも事実である。それゆえ、いま稿者が問題意識を持つ表現を取りあげ、『狭衣物語』の本文と向き合ってみようと思う。もちろん検討対象として掲げる事例は恣意的なものとなるた

めに本稿自体、その客観性を担保しうるかどうか不安を残すけれど、本稿を捨て石とすることで本文の研究がより活発となるのであれば、それもまた意味があるように思う。

以上のような次第で『狭衣物語』の引用表現、その中でも特に引歌表現に焦点を絞って、本文異同について検討したい。

### 一、『狭衣物語』の引用表現概観

『狭衣物語』の引用表現にはいくつかのレベルがあることは知られている。ときに〈術学〉的とさえ評される引用表現の諸相について、その一端を巻一・起筆部を例とし、確認しておきたい。なお掲げる引用本文は仮名に漢字をあてたり、記号を付したりするなどの処置を施している。

#### ○ 深川本・巻一・一丁表裏

① 少年の春惜しめども留らぬものなりければ、三月も半ば過ぎぬ。御前の木立、何となく青みわたれる中に、中島の藤は、②松にとのみ思ひ顔に咲きかかりて、山ほととぎす待ち顔なり。池の汀の八重山吹は、井手のわたりにやと見えたり。③光源氏、身も投げつべし、とのたまひけんも、かくやなど、独り見たまふも飽かねば、侍童の小さきして、一房づつ折らせたまひて、源氏の宮の御方へ持て参りたまへれば、御前に中納言、少、中将などいふ人々、絵かき色どりなどせさせて、宮は御手ならひせさせたまひて、添ひ臥してぞおはしける。

①は「背燭共憐深夜月 踏花同惜少年春」(『和漢朗詠集』・春夜・白居易・二七)を典拠とする表現であり、引詩の事例といえる。当該詩引用による表現効果については、これまで諸賢により縷々論じられてきたところであるから本稿では割愛する。②は「夏にこそさきかかりけれふぢの花松にとのみも思ひけるかな」(『拾遺集』・卷三・夏・八三・源重之)を引くとされる。如上の理解は『新編日本古典文学全集』(小学館)や『狭衣物語全註釈Ⅰ』(おうふう)、各種注釈書が指摘するけれど、藤が松に掛かるという構図は韻散文問わず珍しいものではなく、一般的な和歌的表現と考えることもできるから、深川本本文②を引歌表現として断定しなくともよいだろう。③についても、内閣文庫本のように「松にとのみも思はず咲きかかりて」とある場合は和歌的表現というよりもむしろ引歌表現と考える必要がある。——このように和歌的表現と引用表現との差異は、数字程度の異同<sup>④</sup>がもたらすものであるから、その区別は容易でない。

また③「光源氏、身も投げつべし」は『源氏物語』胡蝶巻の玉鬘に恋慕する蛭兵部卿宮へ源氏が寄越した歌「淵に身を投げつべし」とこの春は花のあたりを立ち去らで見よ、あるいは若菜上巻の朧月夜への源氏の贈歌「沈みしも忘れぬものをこりずまに身も投げつべき宿の藤波」を承けるとされる。『校本狭衣物語卷一』(桜楓社)などを確認すると、諸本「身もなげつべし」とあるから、表現上若菜上巻の引用とみた方

がよいかもしれない。③の事例で押さえておきたいのは、引用の「と」によつて引用句であることが示される本文も存在するということである。

加えて、『狭衣物語』の起筆部は

○『源氏物語』胡蝶巻・『新全集』③・一六五頁

三月の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よりことに尽くしてにほふ花の色、鳥の声、他の里には、まだ古りぬにやとめづらしう見え聞こゆ。山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど、若き人々のはつかに心もとなく思ふべかめるに、……

を敷くと理解されている。これを引用表現といつてよいかは判断が難しいが、『狭衣物語』には先行作品を承ける表現もみえる。

上述の在り方に加え、①②③の事例からみえてくるのは『狭衣物語』における引用表現の多様さである。それゆえ検討対象とする『狭衣物語』本文が引用表現と思われるとき、そのレベルがどのようなものであるか、あるいは、そもそも当該本文が和歌的表現に過ぎず、引用表現と理解して問題ないかを精査する必要がある。たとえば、流布本系本文に引歌が認められるからといって、それに対応する他系本文が流布本系本文と同様の解釈でよいというわけにはいかないのだ。

なお基準本文を設定のうえ、流布本系本文、異本系本文、深川本系本文、混態本文、それぞれにおける引用表現のレベ

ルを精査し『狭衣物語』の文体についての再検討が本文研究を行ううえで必要だろうと私は思う。これについては別稿を期したい。

二、引歌表現の本文異同(1)―同系本文間の異同

やや冗長となつてしまつたが、『狭衣物語』の引用表現の種々相についてある程度確認できたかと思う。本節では同系とされる本文間にも見える異同を取りあげ、異文の生成過程について考えてみたい。用いるのは深川本と内閣文庫本である。深川本は鎌倉初期写と目される『狭衣物語』諸本のなかで最古の写本であり、内閣文庫本は深川本系本文を多量に備える近世期書写本である。なお三谷系統論、中田剛直諸本論にて上述伝本は深川本・内閣文庫本・平出本の三本とで一群を形成する伝本とされている。以下、問題の本文を掲げる。

① 深川本・巻一・二九丁裏〜三〇丁表

紫のみのしろ衣それならば乙女の袖にまさりこそせめ

② 内閣文庫本・巻一・二二丁裏〜二三丁表

紫のみのしろ衣それならば乙女の袖にまさりこそせめ

と申されぬるも、何とか聞き分かせたまはん。いづれも

昔の御ゆかり離れぬ御仲どもなれば、いとよかりけり。同系本文とみられるだけあつて両本文間に大きな異同はないようにみえる<sup>10</sup>。問題の本文は①②における囲み表示部「向かひの岡」と「昔の御ゆかり」の対立である。物語文学を読むなかで「向かひの岡」なる表現をみることはほほえないが、どうも典故の存在が疑われる。そこで当該表現の用例を拾うと、①「向かひの岡」は次に掲げる小町歌の影響下にある表現と思われる。

○ 冷泉家時雨亭文庫蔵唐草裝飾本『小野小町集』・八四

(見し人のなくなりしころ)

思 むさしの、むかひの岡の草なれば根を尋てもあはれとぞ

右の歌は『古今集』「紫のひとつとゆゑにむさしのの草はみながらあはれとぞ見る」(巻一七・雑歌上・八六七・よみ人しらず)の影響下にあるから「ゆかり」を詠う和歌として位置づけることができる。ここに②「昔の御ゆかり」との間で関係性をみることが可能かもしれない。

両表現の間に行文上の対応関係があることは一見して明らかだが、そのほか何か共通する要素はないのだろうか。幸い深川本と内閣文庫本を底本とする注釈書が存在するから、囲み表示部をめぐる解釈についても確認し、この疑問について整理しようと思う。

① 『新全集』・五一頁(底本・深川本)

源氏の宮も、女二の宮も、どなたも「向ひの岡の草」の根のように血のつながりの深い間柄なので「紫」とお詠みになったのは、まことによかつた。

② 『全註釈Ⅰ』巻一(上)・一九九頁(底本・深川本)

(というのは、源氏の宮にしても女二の宮にしても)どちらも、(源中将には)「向かいの岡」の歌ではないが御血縁の遠くない御間柄であるので、(武蔵野の紫のゆかりというのが帝のお考えのように、女二の宮であつても)それはそれでちつとも間違つてはいないのであつた。

③ 『大系』・五一頁・頭注一五(底本・内閣文庫本)

(というのは)源氏宮も女二宮のどちらも、狭衣には昔からの御血縁の離れない御間柄であるから、武蔵野の紫のゆかりといつても、本当に間違つていなかったのであつた。

『新全集』が「向かひの岡は離れぬ御仲どもなれば」を「向ひの岡の草」の根のように血のつながりの深い間柄なので」と現代語訳を付すが、離れないのは「向かひの岡」でなければならぬからやや問題のある解釈といえる。『全註釈Ⅰ』は「向かいの岡」の歌ではないが御血縁の遠くない御間柄」と読み解いている。①②をみるかぎり「向かひの岡」は「ゆかり」とほぼ同義に用いられる表現であると考えてよいだろう。当該表現と「昔の御ゆかり」との間には行文上の対応のみならず意味上の対応もあるということがわかる。

ここで肝腎なのは「昔の御ゆかり」という表現から「向かひの岡」が派生しうるか否かという点にある。「向かひの岡」を詠み込み、かつ当該表現に「ゆかり」の意が響く和歌は『狭衣物語』成立以前に小町歌を措いてないために、享受者の中には当該表現が解釈困難な者もいたかもしれない。このような享受者が本文を書写するに及んで「向かひの岡」という表現を読解の容易な表現「昔の御ゆかり」に改める可能性は考慮されてよからう。一方でこの逆、つまり「昔の御ゆかり」とある表現から詠歌例のわずかな「向かひの岡」を想起し、新たな本文を生じさせることがあるかと問われれば、難しいものがある。とすると、ここは「昔の御ゆかり→向かひの岡」という生成過程よりもむしろ「向かひの岡→昔の御ゆかり」、つまり享受者間に共通理解のない表現から一般的な表現へと、つまり本文の派生経路を考えるのがよいのではないか。ただし両本間に直接の書承関係はなく、他本本文から「昔の御ゆかり」が発生した可能性や「向かひの岡」がそもそも小町歌とは異なる散佚歌によつて生じた表現である可能性を排除できない点は留意しておきたい。

なお「向かひの岡／昔の御ゆかり」に対応する本文の校異を簡単にまとめると次のようになる。

① むかしの御ゆかり

——内閣文庫本・平出本・宇和島伊達文化保存会本

② むかへのおかは——宮内庁三冊本・松井三冊本

③ むかへのおか——為明本  
 ④ むかゝのおか

——慈鎮本・為家本・清範本・為相本・為秀本  
 ⑤ むかひの岡——永青文庫本・近衛一本

⑥ むひのをりは——龍谷本・中田本・神宮文庫本

⑦ むかひのをりは——松浦本

深川本表記「むかひのをか」と同様のものは掲出しなかつた。また助辞の類の異同はここでは無視して校異を掲げた。

①から⑦をみると、①を除く校異は表記違い、または誤脱行の類いでおおむね処理できるが、「むかしの御ゆかり」のみ掲出異文の中でも特異であると知られる。それゆえ、断片的にすら伝わらない本文との関係を論じるには慎重でなければならぬ。ひとまず「むかしの御ゆかり」は「向かひの岡」本文から派生したと考えておくのが、諸本の伝存状況、および現存本文の諸相に鑑みるかぎりいまのところ穩当だと思ふ。

三、引歌表現の本文異同(2)——鎌倉期書写本間の異同

I

ここまで同系本文間における引歌表現の本文異同について確認してきたわけだが、その結果、引歌表現が非引歌表現へ、言い換えれば、特定表現から一般表現へと変容した可能性を見出す余地があるかもしれぬことが知られた。本節では、前節とは異なり、同時代書写本間における本文異同を取りあげ、

その生成過程について考えてみたい。幸い『狭衣物語』には鎌倉期書写本がある程度伝わっているから、古写本群の対校により鎌倉期本文について検討しようと思ふ。ただし検討の都合上、元和九年古活字本の本文も併せて掲げることとする。掲出本文は久方ぶりに春宮のもとへ参つた狭衣と春宮とのやりとりを描くものである。

① 為明本・卷一・五三丁裏〜五四丁表

春宮に参りたまへれば、「入りぬる磯なるが心憂き事」とただ恨みさせたまふを、「乱り心地、例ならずはべりて、暑き程の宮仕へはいと怠りはべるなり」と啓したまへば、「何心地のか常に悪しかるべきぞ。思ふ事ぞあらむ。我には隔てず宣へ」と、近ふむつれかからせたまへば、「心地悪しかるばかりは、何事をか思ひはべらむ。これ御覽ぜよ。かう瘦せはべるは。死ぬべきなめり」とて、さし出でたる腕などの白う美しげなる様、女もかからじかしと見たまふ。「源氏の宮はかくやおはすらん」と、あぢきなくよそへられて、切に引き寄せられたまふを、「あなむつかし。暑うはべるに」とひこじろひたまへる御あはひ、いとをかし。

② 為家本・卷一・四六丁表〜裏

春宮の御かたに参りたまへれば、「しばしも見えたまはねば、いとつれづれなるに九重の内ながら見ゆることの難き」と恨みさせたまへば、「世の常は心地の例ならず

候ひて、暑さのほどにいとうれはし<sup>(マ、マ)</sup>らて候はぬなり」と  
て、げに、常よりも悩める気色のたをくとなまめかし  
き気色の若き御心には、「かやうならん女かな。源氏の宮、  
かくもおはすらん」と、向かひの岡のむつまじう思しめ  
されて、切にむつれさせたまひて、「仲澄の侍従の真似す、  
と人のいひしはまことなりけり。むべこそ、おとどはつ  
れなかりけれ」とのたまはするを、……

③ 元和九年本・卷一之上・三〇丁表〜三一丁裏

春宮に参りたまへれば、「入りぬる磯なるが心憂き事」  
と恨みさせたまへば、「乱れ心地の例ならずのみはべり  
て、暑き程はいとど宮仕へ怠りはべるなり」とせいした  
まへば、「何心地にか常に悪しかるべきぞ。思ひたまふ  
事ぞあらん。我には隔てず宣へ」と、近うむつれかから  
せたまへば、「心地悪しかるばかりは、何事をか思ひは  
べらん。これ御覽せよ。かく瘦せはべらぬべきなめり」  
とて、さし出で給へたる腕などの白く美しげなる様、女  
もえかからじかしと見たまふ。「源氏の宮はかくやおは  
すらん」と、あぢきなくよそへられたまひて、切に引き  
寄せられたまふを、「あなむつかし。暑くはべるに」と  
ひこじろひたまへる御あそひ、いとをかし。

① 為明本は鎌倉末期(あるいは南北朝期)写とされる伝本  
で② 為家本は鎌倉中期写と目される伝本である。挙例①は③  
をみるとわかるように流布本系本文と判断してよいだろう。

②は異本系本文と考えられる。同様の本文をもつ他本には慈  
鎮本・紅梅文庫本が知られる程度で諸本に多く認められるも  
のではない。

さて、まず注目するのは破線部である。①破線部「入りぬ  
る磯」は次の歌を引くと考えられる。

○『拾遺集』・卷一五・恋五・九六七

(題しらず) (坂上郎女)

しほみてば入りぬるいその草なれや見らくすくなくこふ  
らくのおほき

右の歌は『万葉集』歌だが『古今六帖』にも入集しており、  
平安中期には人口に膾炙していたと考えてよからう。とな  
ると、① 為明本破線部「入りぬる磯」が喚起する意味は挙例歌  
下句「見らくすくなくこふらくのおほき」となる。つまり、  
参内しない狭衣が訪れるのを待つ春宮の心情を表現すること  
になる。したがって、① 「入りぬる磯なるが心憂き事」と  
ただ恨みさせたまふを「は狭衣の無沙汰を東宮が恨むものと  
わかる。この①に対応する②本文はといえば、破線部「しば  
しも見えたまはねば、いとつれづれなるに九重の内ながら見  
ゆることの難き」であることは当該表現前後の行文構造が一  
致することからもわかる。肝腎なのは① 「入りぬる磯」が喚  
起する意味と②破線部の解釈とが近いことだ。これは前節で  
確認した「向かひの岡／昔の御ゆかり」のボタンと同様とい  
えないだろうか。——② 「しばしも見えたまはねば、いとつ

れぐなるに九重の内ながら見ゆることの難き」から特定の一首に収斂される①「入りぬる磯が心憂き事」という本文が発生したのではなく、むしろその逆、①↓②、つまり流布本系本文↓異本系本文という本文の派生経路を想定することになる。

ただし「入りぬる磯」は「入りぬる磯の」の形で『源氏物語』(紅葉賀巻)や『浜松中納言物語』(巻三)、『夜半の寢覚』(巻五)、そして『狭衣物語』巻一に挙例とは異なる用例が一つ存在する引歌表現であるから、平安後期物語にあつては既に一般化した表現であつたと考えてよいかもしれない。それだけに当該表現は享受者の中で共通理解のものとなつていた可能性もある。となれば、②↓①のように散文表現から「入りぬる磯」が生じたと考えることもできるため、なお詳密な検討が俟たれるところである。

## II

次は①二重傍線部「源氏の宮はかくやおはすらん」と、あぢきなくよそへられて(切に引き寄せられたまふを)とその②為家本における対応本文「源氏の宮、かくもおはすらん」と、向かひの岡のむつまじう思しめされて(切にむつれさせたまひて)について考えたい。両本文傍線部が対応関係にあることは下接本文が共通性の高いものであること、また行文構造が重なる点からも知られるところである。なお

②「向かひの岡」は前節でも掲げた小町歌を承けると思しい。

①二重傍線部では狭衣の「ゆかり」として源氏の宮を思い起こす東宮の在り方が描かれている。②では挙例部全体からいえば①とは異なる物語世界を描くが、問題としている箇所については①同様とみてさしあたり問題あるまい。それゆえ①②二重傍線部は意味上重なると考えてよいだろう。となると、第二節にて確認した「向かひの岡」事例と同様に特定表現から一般的な表現へという流れ、つまり②↓①、異本系本文↓流布本系本文という生成過程を想定してよいのかもしれない。

ちなみに①②二重傍線部に対応する本文を深川本から拾うと「瘦せさせで、枕はあれどや。いみじう臥しよげにあんめれ」とてもろともともに臥させたまふを」とあり、独自異文となつている。したがつて深川本の書写年代である鎌倉初期、あるいは同本親本の成立期である平安(末)期には少なくとも三種の本文が存在していたと考えられる。

## III

ところで、次に掲げる事例についてはどうだろう。

① 為明本・巻一・四四丁表裏

「今よりはいかに憎ませたまはんずらん。人目あやしくや侍らん。憎ませ給なよ。岩切りとほし侍りとも、音聞きもあるまじきことと思ひ給ふれば、よに見苦しき心ぞ

とは御覽せられじ。あまり思ひわび侍りなば、通はぬ里にも行き隠れ侍らばさぞかし、とおぼし出でさせ給へよ」と、聞こえ知らせ給こと思ひやるべし。

② 慈鎮本・卷一・三二丁裏〜三三丁表

「なかなかいみじき御心まどひなるぞ、いまよりは、いどいかに憎ませたまひずらん。いちしるからん、御心かばかりは、なかなか人目、いかがはべらん。思しうとませたまふなよ。よし御覽せよ。かばかり聞こえさせはべれば、世にもはべらじ」といふいふ、立ち出でたまひぬ。指貫の裾さへやぬるらん、あまりみえたまふ御気色なり。

③ 深川本・卷一・三七丁表〜裏

「むげに知らざらん人のやうに、疎ましう思しめしたるにこそ心憂けれ。よし御覽せよ。身はいたづらになり侍とも、あるまじき心ばへとは、よも御覽せられじ。殿や宮などの、一方ならず思し嘆かんと、御心の中、みなこの年月思ひたまへ知りたれば、遂には世にかやうにても見えまらせじ。かかる心ありけり、と世に侍らん限りは、これよりうとうとしく思しめし変はるな。

場面は源氏の宮へ胸中を吐露した狭衣を描いたものである。注目したいのは、源氏の宮へ思いを打ち明ける狭衣の文句にみえる①二重傍線部である。当該本文は「吉野河いはきりとほし行く水のおとにはたてじこひはしぬとも」(『古今集』卷

一一・恋一・四九二・読人しらず／『家持集』・二九七)を踏む引歌表現と通行する注釈書では読み解かれている。「岩きりとほし(侍りとも)」が、とすると、右に挙げた歌の下句「おとにはたてじこひはしぬとも」、つまり、噂になるようなことにはいたしませんまい、恋死ぬとしても」という意を喚起すると考えなくてはならなくなる。このことは①二重傍線部と対応する②③本文・囲み表示部のそれぞれが「世にもはべらじ」、「身はいたづらになり侍」とあり、これらが恋死をいう表現であることから判断してよいかに見える。けれども、たとえ①「岩切りとほし侍りとも」が「吉野河いはきりとほし……」の引歌表現ではなく、和歌的表現であるならば、当該表現は本来、轟音を響かせ岩を切り通し流れる吉野川のように激しく滾る恋心であったとしても、などと読み解かれるはずのものではなかったか。というのも、①「岩切りとほし侍りとも」直後の表現が「音聞きもあるまじきことと思ひ給ふれば、よに見苦しき心ぞとは御覽せられじ」、つまり、人聞きもあつてはならないことと思ひ理解しておりますので、決してお見苦しい心づもりをお見せしますまい」と外聞を気にしつつ、胸中を訴える狭衣の様子を描くからだ。となれば、②「世にもはべらじ」と③「身のいたづらになり侍」、つまり「死」をいう表現を持ち出し、源氏の宮へ迫る異本系本文と深川本系本文の狭衣と流布本系本文の狭衣の在り方が異なることになる。

ここまで二つの理解を示したが、それらは①「岩切りとほし侍りとも」を引歌表現とみるか、あるいは和歌的表現と読み解くかの立場の違いによつて生じた解釈のヴァリエーションに過ぎない。けれども、この解釈差が本文の動態を捉えるさいの手がかりとなるし、またネットワークともなる。——解釈如何によつては、本文の先後関係が明らかにならない場合もあるということだ。

### まとめ

ここまで、目につきやすい対立事例を取りあげ、検討を加えてきた。『狭衣物語』本文の先後関係は、異本系本文が流布本系本文に対して後発と理解されがちだが、必ずしもそうでない可能性の存在をわざわざかばかりにでも示すことができたのであれば、本稿にも意味があつたかと思う。異本系本文と流布本系本文のいずれが先発したかは各本文、つまりケース毎に検討する必要があるが、巻全体を統一的に把握する本文捕捉に因つてなされるものではなく、後考を俟ちたい。

なお重ねてとなるが、本稿の検討結果が巻全体の、あるいは各本文すべての前後関係へ敷衍できるものではない点はご注意いただきたい。というのも、あくまで本稿は引歌表現の事例に焦点を絞つたものであり、たとえば「異同の山」といわれる天稚御子降下事件や飛鳥井の女君物語の場面における異同等などを射程に捉えたものではなく、またプロットや作品構

成のレベルを問題としたものではないからだ。

### \*

最後に、現在『狭衣物語』研究のなかで広まりつつある誤解について注意を促しておきたい。近ごろ発表される研究論文の中に片岡利博や後藤康文が流布本系本文に原典をみるとする説明を施すものがあるが、これは全くの誤りである。たとえば片岡は深川本系本文が後発本文であることは指摘したけれど、異本系本文と流布本系本文の関係は後考を俟つ立場にあり、「原典／原態」がいずれの本文であるかといった見解を示したことはない。いま通行しつつある誤解に拠る検討が蓄積されれば、冒頭でも述べた三谷系統論のような問題が再度将来されかねない。絶大な影響力のある片岡論だけに、その意味するところを正確に把握したうえで『狭衣物語』を考証せねば、その結論は的外れなものとなるかもしれぬことに各自が自覚的であればならない。

### 【注】

- (1) 今井久代「『狭衣物語』異本系本文の世界―飛鳥井君物語を中心に―(『国語と国文学』九四巻一二号)や同「『狭衣物語』の異文と改変」(後藤康文・倉田実・久下裕利編『狭衣物語の新世界』(武蔵野書院、平成三一年二月)がある。ただし、古筆切研究を含めば、須藤圭「狭衣物語のからみあう異文―古筆切を横断する」(横井孝・久下裕利編『王朝文学の古筆切を考える―残欠の映発』(武蔵野書院、平成二六年五月)や久下裕利による考究を挙げる

- ことができよう。
- (2) 三谷系統一『狭衣物語の研究「伝本系統編」』(笠間書院、平成二年、初出は昭和一〇年・昭和五九年)収録の一連の論考。
- (3) 引歌表現の種々相を詳しく論じるものには、長谷川佳男「引用本文と異本を生む想像力」(『論叢狭衣物語』3 引用と想像力)(新典社、平成一四年)や田中佐代子「狭衣物語」引き歌表現の諸相(『同前掲書』、後藤康文『狭衣物語』の引歌・歌ことば——作中歌の形成と受容をめぐって——)(注1)後藤はか編・掲出書)などがある。
- (4) 後藤康文「文学史上の狭衣物語——術学、の美学——」(注1)後藤はか編・掲出書)。
- (5) 本稿における和歌引用は、私家集については『新編私家集大成』(エムワイ企画)を利用し、それ以外は『新編国歌大観』(角川書店)を用いた。ただし、私家集からの引用については適宜、仮名を漢字に改めたり、清濁を付したりするなどの措置を私にとった。
- (6) 片岡利博「引用論と本文異同」(同『異文の愉悅 狭衣物語本文研究』(笠間書院、平成二五年))。片岡のいう「和歌的表現」とは「王朝和歌の世界で育ってきた」表現であり、和歌伝統の中で醸成されたものといえる。そのような表現に特定一首を措定することは難しい。引用表現を問題とすると、片岡が指摘したように引歌表現と「和歌的表現」の区別に意識的でなければ、検討そのものに思わぬ誤謬が孕まれることにもなる。
- (7) 『源氏物語』本文の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)を利用した。
- (8) 中田剛直「校本狭衣物語 卷一」(桜楓社)と『附記I』掲出参看伝本に拠る。
- (9) たとえば『狭衣下紐』をみると「一 井てのわたり」に対して「春の池や井手のかはせにかよふらん岸の山吹そこもほへり」(胡蝶巻・『新全集』③・一六七頁)を掲げるとともに、続けて「源氏胡蝶巻のおもかげ也」とあることも胡蝶巻引用が支持される要因の一つといえる。
- (10) 三谷系統論、ならびに中田諸本論において、たしかに深川本と内閣文庫本は同一系統に分類されているが、その機械的な検討手法に問題が残るけれど、中田剛直「狭衣物語巻一伝本考」(『国語と国文学』第三五巻五号昭和三年五月)によると、両本文には誤脱行の類いとは思えない異同が多々ある。それゆえ内閣文庫本文を既存の系統論に従い、画一的に深川本文と同じと判断してしまおうといった在り方には注意が必要である。
- (11) 「向かひの岡」そのものの用例を拾えば、小町以前では『万葉集』「出見向岡本繁開在花不成不止」(巻第一〇・春相聞・一八九四)がある程度で、小町以降では「永久百首」(永久四(一一一六)年)の「みわたせばむかひのをかの夏草をたがかふ駒のためにかるらん」(二四六・夏草・常陸)が早い例となっている。
- (12) 『増基法師集』・二二番歌(冷泉家時雨亭文庫本)詞書には「しほみてば」歌を用いたやり取りがみえ、「入りぬるいその」といえば当該歌が想起されるほど知られていた実態がわかる。
- (前略)又、波にも浮かびてうち寄せらるる、を、「かれ見給へ、入りぬる磯の」<sup>①</sup>といへば、かへる人、「恋ふる日は」と、心ある顔にいへば、いほぬし、「熊野おのづから」といへば、「浦の浜木綿」といふるに、いほぬし、重ねて、「何無し」とこそといへば、かへる人、「なかなかに」とて
- もしほ草なみはうづむとうづめどもいやあらはれにあらはれぬめ

り  
なお『増基法師集』では「入りぬる磯の」に対して「恋ふる日は」と応えるが、これは「しほみてば」歌の他書所伝（『新撰和歌集』／『歌経標式』）本文が「見る日すくなくこふらくおほし」とあることに関係しよう。

【附記Ⅰ】

本稿で参看した『狭衣物語』伝本は以下のとおりとなっている。伝本名を掲げたのち、その出典を記す。本文引用にさいして、仮名を漢字に改めたり、句読を切ったり、清濁を付したりするなどの措置を私にとった。なお『校本狭衣物語 巻一』収録伝本は以下に記さないかぎり主に同書を用いた。

【鎌倉写本】

深川本—『古典聚英 深川本』（古典文庫）。為家本・高野本—『古典聚英 為家本』（古典文庫）。為明本・慈鎮本・清範本—『狭衣物語諸本集成』（笠間書院）。為秀本—静嘉堂マイクロフィルム（雄松堂）。松浦本（天理図書館蔵）—天理図書館デジタルプリント。為相本（宮内庁書陵部蔵）—紙焼き写真。

【室町／近世写本（板本）】

内閣文庫本—紙焼き写真。元和九年古活字本—『古典資料類従7』（勉誠出版）。承応板本—『平安朝物語板本叢書2』（有精堂出版）。龍谷大学蔵四冊本—公開画像。九大細川本—公開画像。神宮文庫本—秋野敦子「神宮文庫本『狭衣』翻刻（巻一）」（琉球大学教育学部紀要）六二号、平成一五年三月。宇和島伊達文化保存会本—紙焼き写真。永青文庫本—『細川家永青文庫叢刊』（汲古書院）。近衛一本—紙焼き写真。

【附記Ⅱ】

本稿はJSPS特別研究員奨励費（課題番号：19111542）の助成を受けた研究成果の一部である。

（こばやし・ただまさ 本学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）